



ごちそう帳

新・ちくま文学の森 11

筑摩書房

ごちそう帳 〈新・ちくま文学の森11〉

一九九五年七月二十四日 第一刷発行

編者 鶴見俊輔（つるみ・しゅんすけ）

安野光雅（あんの・みつまさ）

森毅（もり・つよし）

井上ひさし（いのうえ・ひさし）

池内紀（いけうち・おさむ）

発行者 森本政彦

発行者 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 ㊦ 一一一

振替〇〇一六〇―八―四一二三

装本 安野光雅

印刷所 三松堂印刷

製本所 鈴木製本所

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが左記に御送付下さい。送料小社負担にてお取特致します。ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

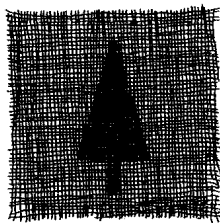
〒三三一 大宮市櫛引町二一六〇四 筑摩書房サービスマスター

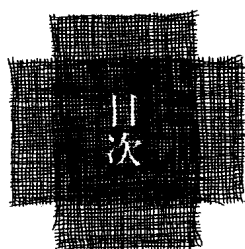
TEL 〇四八―六五一―〇〇五三

©S. TSURUMI M. ANNO T. MORI H. INOUE

O. IKEUCHI 1995 Printed in Japan

ISBN4-480-10131-4 C0393







逸題 いつだい

.....

井伏鱒二 8



食うえ物

.....

国分一太郎 11

故郷横浜 よこはま

.....

獅子文六 19



母の好物／縁日 えんにち

.....

池波正太郎 33

蜜柑の花まで みかん

.....

幸田文 53

ビスケツト

.....

森茉莉 63

枇杷 びわ

.....

武田百合子 69



山鳥

.....

夏目漱石

75

朝めし

.....

スタインベック

大久保康雄・訳

83

愉たのしき昼食

.....

上林 暁

91

鱧はもの皮

.....

上司小剣

117

鯛たいの妙味みょうみ

.....

深沢七郎

147

月にとび去る話

.....

魯迅 竹内好・訳

159

ごちそう歌集

.....

正岡子規 若山牧水 斎藤茂吉

折口信夫 岡本かの子 火野葦平

179

食いしん坊ぼうより……………小島政二郎……………187

焼筍やきたけのこ……………青木正児……………201

冷や飯たぐあんに沢庵……………子母沢寛……………215



焼豚論ロースト・ピッツグ……………ラム 船木裕・訳……………223

アンコウのドブ煮に／相撲すもうとフグ……………坂口安吾……………239

船の御馳走ごちそう……………内田百閒……………247

伊藤整いとうせい氏の生活と意見より……………伊藤整……………255



酢豆腐すじょうふ……………桂文榮・演……………269

茶粥ちやがゆの記……………矢田津世子……………291

饗宴 きようえん

.....

吉田健一

319

友人メリタルト

.....

アポリネール 鈴木信太郎・訳

335

味

.....

ロアルド・ダール 田村隆一・訳

343



食卓の快樂について しよくたく

.....

ブリアー・サヴァラン

関根秀雄・戸部松実・訳

371

失われた時を求めてより

.....

ブルースト 井上究一郎・訳

393



セントルイス・カレーライス・

ブルース 解説にかえて

井上ひさし

404

ごちそう帳

井伏鱒二

逸題

今宵は仲秋明月

初恋を偲ぶ夜

われら万障くりあはせ

よしの屋で独り酒をのむ

春さん蛸のぶつ切りをくれえ

それも塩でくれえ

酒はあついのがよい

それから枝豆を一皿

「女子文苑」（昭和一一）に、
「小曲」として発表され、翌年
「厄除け詩集」に改題の上収録。

ああ 蛸のぶつ切りは臍^{へそ}みたいだ
われら先^まづ腰^{こし}かけに坐^{すわ}りなほし
静かに酒をつぐ
枝豆から湯気が立つ

今宵は仲秋明月
初恋を偲^{おも}ふ夜
われら万障くりあはせ
よしの屋で独り酒をのむ

(新橋よしの屋にて)

食うえ物

国分一太郎

国分一太郎（こくぶんいちろう）一九二一（明治四四）——一九八五（昭和六〇）山形県生まれ。教師のかたわら、早くより生活綴方運動をはじめ、「教室の記録」を刊行。「むねのどきどきとくちびるのふるえ」など、生々しい少年の感性をうたった詩を発表。文筆生活に入ってから「綴方、教育評論のかたわら」「鉄の町の少年」「リンゴ畑の四日間」などの創作によって、集団の中で成長していく少年像をえがいた。「食うえ物」は「いなかのうまいもの」（昭和五五）の中的一篇。

わたくしたちは、川へ行けばエビを食った。水でザワザワッとすすいで、生きているやつをなまで食った。沢のところへ行けば、サワガニを同じようにして食った。どちらもすこし塩気があって、やはり「食うえ物」(食うことのできるもの)だった。タニシやヌカエビは、家に持ちかえって、つくだににもらって食った。アバカッカという大きなカジカや、サメカという小さなカジカは、川のそばで、焼いて食った。アカメロというナマズに似て、あれよりずっと小さいひげのある赤黄色のやつも焼いて食った。カタツムリも、幼いときにカンの葉だと食わされた記憶(きおく)があって、やはり「食うえ物」だった。

セミもこれに属してはいたが、アブラゼミを食うと、キカズ(つんぼ)になるとの迷信があった。ナンゴ(イナゴ)はこの家でも、お湯で殺したのを、黒砂糖と醬油(しょうゆ)でイナゴ煎(い)りにして食ったから、野生の「食うえ物」にははいらなかった。むしろ、

——その頃(ころ)バプテスマのヨハネ来たり、ユダヤの荒野(こうや)にて教を宣(のたま)うて言う。「なんじら悔(く)いあらためよ。天国は近づきたり」これ予言者イザヤによりて、かく言われしなり。いわく「荒野に呼(よ)ばれるものの声す。主の道をそなえ、その路(みち)すじを直ぐせよ」この

ヨハネはラクダの毛織衣をまとい、腰に皮の帶をしめ、イナゴと野蜜^{のみ}とを食とせり。

(新約聖書・マタイ伝・第三章・一―五)

というように正式の「食うえ物」にはいつていた。

川原には、夏にナワシロイチゴが実り、秋にグミがなった。ナワシロイチゴは、蜂^{はち}とけんかしながら、競争して食った。蜂がいまのいま食いかけたやつは、特にあまくうまかった。小さいグミは、赤提灯^{あかぢようちん}のようにならぬものまで食べ、翌朝大便がつまって泣きだしたりした。やぶに行く^くと野ぶどう^{あま}（エビヅル）があり、トズラゴ（クマヤナギ）があった。トズラゴは小さな黒紫色^{くろむらさきいろ}の小さい甘い実が、こぶしほどにかたまっていた。野ぶどうは種子^{たね}がらみ食い、トズラゴは種子^はを吐きだした。このふたつが、よく実る場所は、子どもの秘密の財産で、ひとに見つけられまいと苦労した。あそこのは「善次郎さのもの」「伝助さのもの」などと縄^{なわ}ばりを公認されているところもあった。

やぶですっぱいものには、スドミ（クサボケ）があった。あのかたい実を、口のなかで汁^じだけ吸うようにかんで、残ったかすは、「材木みたいなところがうかい（多い）な」と、あたりに吐き散らした。秋にはヌルデの実にふく塩のような重い粉がすっぱかった。それをわたくしたちは、ススキサン（酒石酸）と言ってよるこんだ。スカナ（スイバ・スカンポ）は、もちろん食った。葉っぱも食ったし、うす赤い穂^ほをだしたやわらかい茎^{くき}も食った。そのまま